

一二五センチの世界

一宮市立中島小学校三年

水野 陽遥

二月のある金曜日。下校時間に先生が大あわてで、

「ひなたちゃん、おうちにすぐ帰って。」

とほうか後子ども教室の中で言われた。かるい気持ちでお姉ちゃんたちとおしゃべりしながら帰った。げんかんを開けるとお母さんが大げんがをしていた。左足がほうたいでグルグルまき。歩けない。動けない。

「えー、どうしたの。」

わたしはびっくりしすぎて、ドキドキした。お父さんは、東京でおし事をしているのでお母さんと二人の生活。これからどうなるのかと、とても心配になった。それから毎日の生活はともかわった。

スーパーへ行ったときのこと。まつ薬づえでのお買い物はとてもむずかしかった。わたしは、ふと車いすを思い出した。ゆう気をふりしほつて、お店の人に

「車いすをかしてもらえませんか。」

と聞いた。

「ありますよ。どうぞご利用ください。」

とたたんである車いすをかしてくれた。ベンチでまっまっているお母さんの元へ運んだ。しかし、なれていないので使い方が分からなくてこまった。なんとかすすわられたけど、すすまない。わたしは、秋の尾西まつりで車いすの体けんをしたことを思い出した。おし方、すすみ方、まがり方を習った。まず広い場所までおもかったけど一生けんめいおした。と中、で

こぼしてるところがすすまなくてこまった。それからお母さんに、習ったことをつたえた。その時、一二五センチのわたしよりお母さんが小さいことに気づいた。

せまい所へは入れない。気づいてもらえずぶつかりそう。高い場所の商ひんがとどかなくてほしい物が買えない。

「すみません。ごめんなさい。」

とお母さんはお買い物の間ずつと言っていた。わたしは出来るかぎりお手つだいをした。ふと、一人でお買い物するときはだれも手つだつてくれないんだらうなと悲しくなった。わたしが前を歩いてお母さんがついてきていないこともあった。気づかないさかで登れなかった。

車いす生活は、少しの間でもとても大へんだった。わたしはこのけいけんから、三つの声かけをすることに決めた。

一つ目は、こまっている人がいたら、「お手つだいしましょうか。」と声をかける。

二つ目は、車いすがすすまなくてこまっていたら、「おしましようか。」と聞いてみる。

三つ目は、エレベーターでボタンがとどかない人がいたら、「何かいですか。」と声をかける。

知らない人に手つだつてもらったときのお母さんの「ありがとう。」

のえ顔はわすれない。みんながえ顔の世の中がわたしはいいと思う。

